

(財) 建築技術教育普及センター 星野恵子

目的 住環境の水準向上を図る上で「住み手」の意識を高める教育が不可欠であることは周知の事実であり、住居を直接的に扱う教科として、家庭科についても様々な研究がなされている。しかし、住み手を教育する目標は何なのか、といった住教育の基本的な問題は十分検討されていないようである。そこで、本研究では、住教育に古い歴史を持つ英国の実例を参考にして、住教育の目的を解明しようとするものである。

方法 我が国の学習指導要領に近いと考えられる英国の中等教育終了認定試験 (GCSE) のための National Criteria 及び Syllabus、また、この新試験に関する論文を資料として用い、日本の中学学習指導要領との比較分析を行うことにより、学校教育における住教育のあり方を検討することにした。

結果及び考察 まず、双方の共通点として、実践的な態度の重視があげられる。特に GCSE は、就職試験としても利用されており、受け身の学習態度では得られない知識、技術を高く評価すること、また、その内容が社会生活において今日的意義のあるものでなければならぬことが強調されている。こうした主体性重視の教育が、より良い住生活を生むための第一条件であると考えることができよう。相違点は「生活と技術との関係を理解させる」という教育目標に見られる。日本では、技術習得を第一次目標とし、その理解を深めさせようとする。一方、英国では、なぜその技術が必要なのかを考えさせ、「生活と技術」を「人間の欲求とそれを充足させる営み」として理解する態度を身につけさせようとしている。この差から生じる影響について、今後も検討してみたい。